

野火の夜あけ^の^び

菊地 正・作

藤沢友一・絵



野火の夜あけ

菊地 正・作
藤沢 友一・絵



N. D. C. 913/224p/22cm

新少年少女教養文庫 42

野火の夜あけ

1971年10月22日 第一刷発行

定価 650 円

著 者 菊 地 正 ©

発行者 牧 芳 枝

発行所 株式会社 牧 書 店

東京都新宿区揚場町1

電話(269)2081~4 振替東京 196483

印刷所 塚田印刷K. K.

製本所 佐抜製本所

(分) 8393 (製) 06042 (出) 7909

雑草ざっそうのものがたり

歴史れきしには、はなやかな登場者とうじょうしやがいます。英雄・偉人えいゆう・いじんと呼ばれ、時代の流れを彩いろどっている人たちです。

しかし、綴つづられた歴史れきしのかげには、雑草ざっそうのように、たくさんみんの民衆しゅうがいたことを忘れてはならないと思います。

この歴史小説れきししょうせつ『野火のびの夜あけ』は、歴史れきしの表面に出ることのなかった、いわゆる、雑草ざっそうのものがたりなです。雑草ざっそうは、根深く強つよく生きていきます。野辺のべの雑草ざっそうが燃えあがり、燃え広がっていき、野火のびの声を聞くことができます。

耳をすますと、聞こえてきます。

それは、歴史れきしの舞台ぶたいにのぼらなかった、名もない民衆みんしゅうのものがたりであり、人間にんげんのものがたりなのです。

野火の夜あけ

もくじ

*

まえがき

第一話

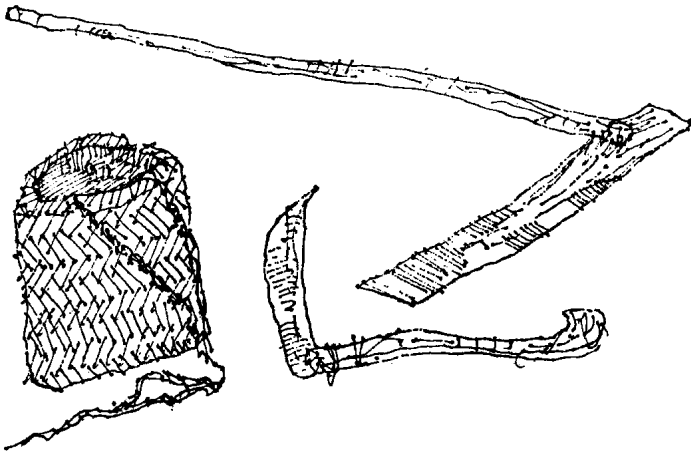
かかし伝でん

1

第二話

しおき河原がわら

41



第三話

遠い野火^{のび}

75

第四話

霧^{きり}の里

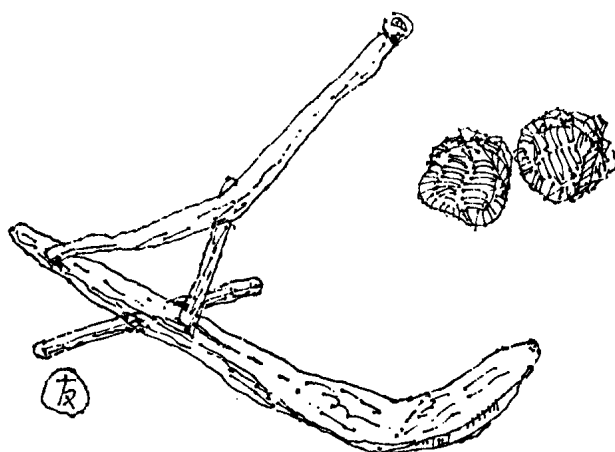
119

第五話

子安^{こやす}マリア

163

あとがき



第一話*

かかし伝^{でん}



きちがいの少女

はるかに武蔵むさしと甲斐かいの国境こっきやうの山々が、墨絵すみえのように浮うかんでいた。

それは、むかし。

寛文十三年かんぶん（一六七三年）、秋あきもさかりの九月のこと、武州多摩丘ぶしゅうたまおかの山路である。

ひとりの四十男が、だまりこくって雑木林ぞうきばやしをのぼっていた。男の名は嘉十かじゅうといつて、ふもと
の村で、村医者むらいしやをしていた。嘉十は、前から山歩きをして調べ、じぶんの「薬草覚え書やくそうおぼがき」にも
記しるしておいた、アケビの群むれている谷をめぐっていたのである。日向村ひなたむらの百姓源藏ひやくしようげんぞうの末娘すえむすめで
ミネという子が、腹はらが痛いいたと泣ないているのを見かねて、よい薬くすりをやろうと約束やくそくしていた。
アケビのくきは、「もくつう」といわれて、はらいたにはもってこいの薬くすりだった。

とつぜん、からすが頭の上で鳴いた。

「だれかな？」

嘉十かじゅうは、立ち止まって道ばたのしげみに声をかけた。すると、熊笹くまざさがゆれて、

「キッ、キキキキ……。」

という、きみの悪い笑い声わらがした。そして赤い着物のそでが、ふわっふわっと踊りあがった。

「世間烏ジャ、アルマイシ、

右築ノ旦那サンニノウ……。」

と、飛び出した少女は、へんなふしをつけて唄った。

声はかすれて、どこかゆがんだひびきだった。着物の前をはだけ、おびを引きずっているだらしのないかつこうは、ひと目で、きちがいの少女だとわかった。長い乱れた髪を、ワラでむそうさにむすんでいた。

「ソメさんかの？」

と嘉十が聞いた。少女は唄いながら踊るように、くるっとひとまわりした。

嘉十は、ずっと前から、ソメ女と呼ばれる、きちがいの少女のうわさを聞いていた。しか

し、顔を見るのは、はじめてだった。

柚木村で、わずかばかりの畑をたがやしている小百姓の娘だということである。十三歳にな

ったばかりだが、近在でもひょうばんのきりようよしだといわれていた。ところが、父親が他人から金を借り、その返済に困って、なけなしの畑を五枚分取りあげられてしまった。それでも足りなくて、娘のソメ女までも、借金奉公といって、はたらいで金が返せるまでつとめなければならぬ、ただばたらきに取られてしまったということだった。

父親の借りた金は、わずかに一両金ということである。わずかにといったけれど、小百姓の

身分みぶんでは思いもおよばぬ大金たいきんだった。どうしてそんな大金たいきんが必要ひつようだったのかは、ソメ狂女きやうじよのうわさ話をする人たちも、このことになるのだれもだまってしまった。

嘉十かじゅうがようやく耳にしたことは、柚木村ゆぎむらあたりは百姓ひやくしやうのばくちがさかんだということだった。百姓ひやくしやうのばくちがさかんなのに、取りしまるはずの村役人むらやくにんが、それをとがめないばかりか、じぶんからばくち場ばくちばに出入りしているともいわれていた。そして、ものすごい繁盛はんじやうぶりだということである。

村役人むらやくにんがだまっているのは、「ばくちのあがり」といって、ばくちに賭けられる金のなん割わりかが、名主なぬしや代官だいかんのふところをぬくぬくと肥こやしているからだといわれた。名主なぬしや代官だいかんをおそれ、柚木村ゆぎむらのうわさ話をする人たちも、おおっぴらには、百姓ひやくしやうのばくちのことにはふれないようにしていた。

柚木村ゆぎむらの百姓ひやくしやうたちは、ばくちに夢中むちゆうになって、ろくに畑仕事はたけしごとをしないものだから、畑はたけは草が生いしげっているということである。用水ようすいの水もかれて、田んぼはひび割われているといわれた。ソメ女じよの父親ちちおやもそのひとりだった。

ばくちは、「もうけ二割わりのそん八割わり」といわれた。めったにもうかるものではない。しかも一どはもうかつたとしても、つぎはまた、二割わりの確率かくりつしかないのだから、いつかは取られてしまう。

ばくちに負けて、ぜにがはらえなくなつた分は、田んぼや畑で取りあげられた。ソメ女の父親も、なけなしの畑五枚を、右築の名主惣兵衛に召しあげられ、それでも足りずに、娘のソメ女は、八王子代官御手代職の増山彦五郎の屋敷に奉公させられた。しかしその後、奉公ぶりが悪いといって、名主惣兵衛の家の下女にまわされたと聞いている。ちょうど、どれいのように、わずかな金で売り買いされ、牛馬のようにこき使われたのである。

「ソメさんかの……。」

嘉十はもう一どたずねた。たずねるまでもなく、うわさのソメ狂女であることはわかっていった。しかし、そう声をかけてやるのが、あわれなきちがいの少女に対する、いたわりに思えたからである。きちがいの少女のおの赤あざは、奉公ぶりが悪いといってせっかんされたときの、責め火のやけどのあとだということである。

「世間烏ジャ、アルマイシ、

右築ノ旦那サンニノウ……。」

きちがいの少女が、また唄いだした。そして嘉十のかたわらをリスのようにすりぬけると、ちよんちゃんと飛ぶように、雑木がぐれに山路をかけおりにいった。

嘉十は、きちがいの少女の消えたしげみをいつまでも見送っていた。少女の唄う声だけが、

雑木林をしないで遠ざかっていった。

村医者嘉十

きちがいの少女の唄っていた唄は、村医者嘉十の作ったものである。

嘉十が、この八王子在石川村に住みつくようになってから、十数年にもなっていた。それまでの嘉十の前身については、村人はだれも知らなかった。嘉十もまた、だれにも話そうとしなかった。旅のこじき坊主とまちがえられる姿で、ひよつこりと現われて、いつのまにか村の小さなお堂に住みついていた。村人たちは、かつて嘉十のことを想像した。

鎌倉あたりの寺から、不都合なことでもしてかして、寺を追われた坊さまだろう……とか、近ごろおとりつぶしになった外様大名の浪人ものだろう……とか、医術の修業中に、なにか悪いことをして、先生から破門されたものだろう……などなどだった。

とにかく、薬をほどこす心得と学問があった嘉十が、村人たちに調法がられて、十数年の年月が流れてしまったといえる。

そのあいだに、嘉十はいつのまにか村医者のようなかたちにおさまっていた。村の子どもた

ちを集めて、手習いや数のかぞえかたなどを教えた。そうしたなかで、嘉十がおりおりに作った唄が、いつか近在の当世唄（流行歌のようにはやる唄）に唄われていた。

烏ドコへ行ク、右築ノ森へ、

地蔵サン、アバヨデ、帰リヤンセ。

烏イナケリヤ、地蔵サン、サビシカロ、

世間烏ジャ、アルマイシ、

地蔵サンハ、赤ゴノ、

オモリ番。

これは、嘉十が子守っ子のために作ったものである。右築にはたくさんのからすがいた。山林を切り出すことを禁じた制札のかけられた森があつて、万治の江戸大火のあとにも、そこだけは木を切り出さずにいた。ほんとうに、＼からすの森＼というのにふさわしかった。

しかし、嘉十が子守っ子たちのために作ってやった、からすの唄は、唄そのまゝの意味とは別に、かくされた考えがあつてのことだった。

それは、右築には近在の名主たちの代表格にあたる、総代名主惣兵衛の屋敷があつた。惣兵衛は、年番名主といわれて年ごとに役割が与えられる名主などや、里主と呼ばれて、むかしから田畑や山林を持っている地主などよりも、大きな力を持っていた。八王子代官の片腕といわ

れる増山彦五郎が、特別にひいきをし、力ぞえをしているからだといわれていた。惣兵衛のうしろには、いつも増山彦五郎の目がひかつていた。

「虎の威をかる狐」のことわざのとおり、惣兵衛のわがままかつてなふるまいは、代官所の勢いをかさにきて、目にあまるものがあつた。

年貢米を定められた割当よりも多く、村人から取りたてることなどは、あたりまえのように行なわれた。米ばかりではなく、村人の副業である柿や栗などにも、一本残らずきびしく調べて、その收穫に納付の割付をした。かつてに、じぶんの仕事に百姓たちを労役にかり出しました。

柚木村の百姓とばくをはやらせて、もうけを得ようと考えたのも惣兵衛のはかりごとだといわれていた。

ひどい仕打ちを受けても、代官所をうしろだてにした惣兵衛には、だまって従うしかなかった。この村人たちの難渋を見かねて、嘉十の心はいたんだ。そして、「世間烏ジャ、アルマイシ……」の唄になったのである。

嘉十の考えは、烏合の衆（烏の集まるように、ざわざわと、なんの考えもまとまりもなく群れるようす）にたとえられ、ざわめき、引きずられて、名主惣兵衛のごきげん取りに心をうばわれるより、地蔵のように、足もとにある大切なものを守れということだったのである。足もとの大切なもの

のを、赤ん坊にたとえて、子守唄にしたものだった。

汗を流し、泥まみれになって、足もとの田をかきまわし、畑をたがやしても、その収穫のほとんどもを取りあげられてしまう。こんなばかなことがあってよいはずはない。いかに名主や代官所のいうことだからといって、だまっていることはないのだという嘉十の考えだった。しかし、嘉十のひそかな期待は、百姓たちには理解されなかった。そればかりか、百姓のなかには、唄の文句にあるとおりに、名主惣兵衛のところへ、ごきげんを取りに行くものさえあった。

嘉十の作った唄は、子守つ子の口から口へ伝えられて広がった。

当世唄が広がると、右築の名主惣兵衛から、嘉十に呼び出し状があった。呼び出しは村の組頭の役にあたっている日向村の源蔵のところに届けられた。

『組頭同道にて、出頭すべきこと。』

というのであった。嘉十は、からすの唄の作詩の意図を見破られたかと思った。

「嘉十さま、いかがなさいます。あなたさまは、いまだに無宿ということになっていますから、おとがめがあると思われまします。」

と、源蔵が嘉十のことを心配していった。できれば、夜、ひそかに村をにげ出し、別の土地へ行つてはどうかともすすめた。嘉十は、石川村に住みついて十年にもなるが、流れものということで、いまだに無宿人のあつかいを受けていた。



嘉十は、源蔵の心配してくれる無宿人のとがめよりも、からすの唄の作詩のことのほうが氣になった。じぶんの考えが、惣兵衛に見破られているか、また惣兵衛がどのようにこの唄を受け取っているかを、確かめたいとも思った。

「源蔵さん、名主のところまで、わたしを連れていってください。」
嘉十は、源蔵にたのんでいた。

おとがめは覺悟だった。にげ出せば、じぶんは無事でも、こんどは組頭の源蔵が、とがめを受けることになると考えた。

ところが、まったく意外だった。嘉十たちを、惣兵衛は喜色満面に出むかえたのである。
「当世唄、氣にいったぞ。嘉十とやら、学があるのう……。」

と惣兵衛は、こじき坊主とまちがえそうな、貧しい身なりの嘉十を一室に案内すると、酒やさかなでもてなした。

覺悟をして出向いた嘉十は、意外なものでなしに、おどろくというよりあきれてしまった。いっしょにきた源蔵は、ほっと胸をなでおろしていた。

名主惣兵衛は、当世唄が、総代名主であるじぶんの勢いを唄っているものと思いちがいでいた。

それは、人々が右築の森へ、右築の森へとなびき、からすの群れのように従い集まってくる。